

知覚教育の必要性

The Necessity of Perceptual Education

樽沼範久

Norihisa Kurenuma

When I'm drivin' in my car/ and that man comes
on the radio/ and he's tellin' me more and more
about some useless information/ supposed to drive
my imagination

The Rolling Stones, "I Can't Get No) Satisfaction," 1965.

情報のない刺激、意味のない刺激は益ではなく害をなす

エドワード・S・リード(一九九五)〔二〕

1 教育再生の廃墟に

国民は学習する機械であるとして、問題は「進歩主義教

育」か「伝統的教育」か。個人の自由・自主性あるいは、自

主性を育てるための「ゆとり」を重視する「進歩主義教育」は、「伝統的教育」の行き過ぎた(と言われる)規制から子供や教育者を自由にする(ことを語る(しかし、「進歩主義教育」を唱える「大人」自身は、どれくらい自由を体現しているのだろうか。))。

学力(指定された教材の理解力・習熟力)や伝統的規律を重視する「伝統的教育」は、「進歩主義教育」の行き過ぎたと言われる個人の放任から標準的学力(「国際競争力」確保のため?)や伝統的規律を保守することを語る(しかし、「伝統的教育」を唱える「大人」自身は、どれくらい学力や伝統的規律を身につけているのだろうか。))。

自由・自主性を唱える「進歩主義教育」の支持者たちは、「伝統的教育」には復古的な国家主義・封建主義に走る

危険性があると批判するだろう。しかし、自由・自主性を唱えているだけの「進歩主義教育」は、実際のところ、自らの批判対象と共犯関係を結んでいる(その理由は後述する)。しかも、これに無自覚ではないか。他方、「伝統的教育」の支持者たちは、個人の自由・自主性ばかり称賛してきた「進歩主義教育」の害悪(と言われるものを)を正し、標準的学力や伝統的規律の再生を計ることが、国民の品格・国際競争力・公共意識(愛国心を向上させると主張するだろう。しかし、学力や伝統的規律を唱えているだけ(そして、学科の授業時間を増やし、「奉仕活動の時間を設けるだけ)の「伝統的教育」は、実際のところ、批判する、害悪を、自らも作り出している(この理由も後述する)。

教育思想・教育行政は何を欲して、「伝統的教育」「進歩主義教育」の二者択一で教育を語り続けるのだろうか。「伝統的教育」に対する反動として「進歩主義教育」が唱えられ、「進歩主義教育」に対する反動として「伝統的教育」が唱えられる……このくり返し。時代の変化という名目のもとに(あるいは、何かしらの政治的意図のもとに)、十分な検

証を欠いたまま(あるいは、検証の社会的共有が余りにも不十分なまま)、その都度口にされる「教育改革」「教育再生」という観念先行型の常套句は、代わり映えのしない振り子をたぐ左右に揺らし続ける。

昨今、右往左往の周期は著しく早く、特に教育の現場は疲労を蓄積させている(ように観察される)。かろうじて獲得できるのは、「教育改革」「教育再生」を理由にした行政や関連業者(種々の教育機関を含む)の仕事と予算と利益の機会。そして、教育という「国民的問題」「国民的話題」、支持あるいは反対することのできる「改革」「再生」の幻想だろうか(幻想に反対する立場もまた、幻想とは異なる「現実」を確保するために、批判できる幻想をどこかで欲しているのではないか)。

「学校改革」の名のもとに現在進められているのは、哲学者ジル・ドゥルーズ(一九二九-一九九五)が「管理と生成変化」(一九九〇)のなかで指摘したように、実際には「閉鎖環境」としての「学校制度の解体」「競争原理・市場原理の強化」と言えるだろう。学校の「閉鎖環境」と職業の「閉鎖環境」の区別が弱まれば、全面化された「生涯教育」の管理環境を整